

昭和五十八年

日本思想史関係研究文献要目

凡 例

一、本要目には、昭和五十八年に発行乃至発表された日本思想史関係の単行本並びに雑誌・紀要論文を収録した。
一、本要目には、日本思想史関係の学術的な研究を選択収録することを原則としたが、一般読者向けのものも適宜収めた。

一、右のように選択した文献を、Ⅰ単行本目録 Ⅱ雑誌・紀要論文目録の二部に分け、次のように配列した。
ⅠⅡ部とも、文献をその内容によって、総雑・古代・中世・近世・近代に分け、さらにそれぞれに属する思想史関係研究文献を、一般・学問道德教育方面・宗教方面・文芸美術芸能方面・政治社会経済方面・その他の項目順に分類配列した。

単行本は、書名・著書名・発行所名の順、論文は、題名・執筆者名・掲載雑誌紀要巻号数の順に記載した。

一、本要目の作成には、東北大学文学部日本思想史研究室所属の助手・大学院学生があたった。

一、日本思想史という学問の性格上から、研究文献の選択に迷うことが多く、短時日の間に作成したためもあって、文献の選択や配列に不備な点があるものと考えられる。大方の御教示をお願いする。

I 単行本目録

総 雑

日本倫理想史研究

講座 日本思想

1 自然

2 知性

3 秩序

日本仏教史

1 飛鳥時代

3 鎌倉時代

4 百済・新羅

禅の古典

2 大応国師語録

3 大燈国師語録

4 夢窓国師語録

9 鉄眼仮字法語

日本禅史の流れ

巫女と仏教史の使命と展開
熊野比丘尼

八幡信仰

観音信仰

野崎守正 英英
ぺりかん社

相良 亨
東京大学出版会

尾藤正英

秋山 虔

田村 円澄
法蔵館

古田 紹欽
講談社

入矢 義高

古田 紹欽
人文書院

萩原 龍夫
吉川弘文館

中野 幡能
雄山閣

速水 侑雄
雄山閣

中国神秘思想の日本への展開

中国・日本における歴史観と隠逸思想

日本の中の朝鮮文化

古 代

日本古典の研究

日本の神話

4 神武東征

古代日本海文化

多元的古代の成立 上・下

古事記の達成

柿本人麻呂論

日本古代僧伝の研究

聖徳太子信仰の成立

日本仏教の心

3 伝教大師と比叡山

10 聖徳太子と叡福寺

式内社の研究

古典を読む 往生要集

中 世

歴史学の再生 中世史を組
み直す

安居 香山
大正大学出版部

小林 昇
早稲田大学出版部

金 達寿
講談社

川 副武胤
吉川弘文館

伊藤 清司
ぎょうせい

松前 健

森 浩一
小学館

古田 武彦
駈々堂出版

神野志 隆光
東京大学出版会

北山 茂夫
岩波書店

佐久間 竜
吉川弘文館

田中 嗣人
吉川弘文館

日本仏教研究所
ぎょうせい

志賀 剛
雄山閣

中村 元
岩波書店

黒田 俊雄
校倉書房

黒田 俊雄
校倉書房

黒田 俊雄
校倉書房

黒田 俊雄
校倉書房

黒田 俊雄
校倉書房

黒田 俊雄
校倉書房

王法と仏法 中世史の構図
乱・一揆・非人
空より参らむ 中世論のた
めに

日本芸能史

3 中世

中世の罪と罰

道元 その思想と教育

一遍

時衆教団の地方展開

利休の年譜

黒田俊雄 法蔵館
岡本良一 柏書房
桜井好朗 人文書院

芸能史研究会 法政大学出版局

網野善彦他 東京大学出版会

加藤健一 吉川弘文館

大橋俊雄 吉川弘文館

金井清光 東京美術

千原弘臣 淡交社

近世

近世史の研究

3 文化論・生活論・学
問論・史学論

西山松之助著作集

3 江戸の生活文化

4 近世文化の研究

岡田章雄著作集

3 日欧交渉と南蛮貿易

4 外から見た日本

近世町人思想史研究 江戸
・大阪・京都町人の場合

伊東多三郎 吉川弘文館

西山松之助 吉川弘文館

岡田章雄 思文閣出版

布川清司 吉川弘文館

近世私塾の研究

徳川初期キリシタン史研究

西海のキリシタン文化綜覧

キリシタン研究 23

生類をめぐる政治 元禄の
フォークロア

水戸史学の伝統

近世禅僧伝

3 雲居和尚年譜

高野長英

阿波の洋学事始

三浦梅園の教育思想研究

南部百姓命助の生涯

幕末教育史の研究

1 直轄学校政策

近代

近代

近代日本の国家像

皇国史観

戦前「家」の思想

日本プロテスタント史の諸
問題

近代真宗の展開と安芸門徒

海原徹 思文閣出版

五野井隆史 吉川弘文館

鶴田文史 天草文化出版社

キリシタン文化
研究会 吉川弘文館

塚本学 平凡社

小林健三 錦正社

照沼好文 思文閣出版

平野宗浄 思文閣出版

半谷二郎 旺史社

佐光昭二 徳島市立図書館

橋尾四郎 吉川弘文館

深谷克己 朝日新聞社

倉沢剛 吉川弘文館

日本政治学会 岩波書店

永原慶二 岩波書店

鹿野政直 創文社

日本プロテスタ
ント史研究会 雄山閣

熊田重邦 広島女子大学

幕末明治文学と庶民経済

阿達 義雄 東洋館出版

困民党蜂起 秩父農民戦争
と田代栄助論

千嶋 寿 田畑書房

井上毅と明治国家

坂井 雄吉 東京大学出版会

人物・日本資本主義

大島 清他 東京大学出版会

4 明治のイデオログ

大正デモクラシーの群像

鈴木 正節 雄山閣

天皇機関説の周辺 三つの
天皇機関説と昭和史と証
言

宮本 盛太郎 有斐閣

戦時下の唯物論者たち

古在 由重 青木書店

日本経営思想史 戦時体制
期の経済学

斐 富吉 マルジュ社

II 雑誌・紀要論文目録

総 雑

日本人の異文明包摂力と神
道

石田 一良 日本及日本人
一五七一

「神」から「翁」へ―基層
信仰にかんする一考察

山折 哲雄 国立歴史民俗博
物館研究報告二

日本古武道における身体論

中村 信二 理想 六〇四

日本人の自然観―和歌に現
われた自然観の展開

夜久 正雄 比較思想研究九

修験の道と哲学―日本的靈
性の文学的考察

土肥 貞之 文明(東海大学)
三七

日本文化論の方法に関する
考察―文化形成の主体をめ
ぐって

宇佐神 正明 四国学院大学論
集 五四

日本天台における論義の系
譜―序―

白土 わか 大谷大学研究年
報 三六

日本華嚴の展開について

平岡 定海 理想 六〇六

浄土系仏教とキリスト教の
救済論の一異に関する考察

原田 博充 基督教学研究六

日本の伝統的宗教的感情と
キリシタン教との関連につ
いて

名木田 薫 //

北陸における真宗の発達に
ついて―蓮如の教化と西田
哲学

橋本 芳契 日本海文化一〇

仏教文学研究の軌跡と課題

山田 昭全 国文学解釈と鑑
賞 四八―一五

渡部正一著「日本古代中世
の思想と文化」

鎌田 東二 神道宗教一一二

「新しい歴史学」への模索
―網野善彦氏の『無縁・公
界・楽』をめぐって

石井 進 歴史と社会 二

網野善彦著「東と西の語る
日本の歴史」

高橋 富雄 日本史研究
二四八

津田左右吉博士と道教―福
井文雅氏の書評―道教と
日本文化―に答えて

福永 光司 東方宗教 六一

古 代

古代伝承文学と基層文化について—異文化の受容と変容の問題

佐々木 孝二

文経論叢(弘前大学文学部) 一八

『続日本紀』の編纂過程と卷構成
智光説話の形成—「日本霊異記」と—日本往生極楽記」の対比

波々伯部 守

日本史研究 二五三
古代史の研究五

△罪△△がれ△と「大祓詞」—古代の△罪△・△ト—続—

多田 一臣

古代文学 二三

紫式部と史学思想

岩城 隆利

名古屋学院大学論集 人文・自然科学 二〇—一

神話と「歴史」との間—ホメーロスと古事記

辻村 誠三

比較思想研究 一〇

源氏物語における「王権」論の可能性

広田 収

人文学(同志社大学人文学会) 一三九

比較研究における本邦国生み神話

尾畑 喜一郎

国学院雑誌 八三—一一

源氏物語における女の宿世—「憂き身」の自覚をめぐって

佐藤 勢紀子

『源氏物語』の探究 第八輯

古事記における当代性の問題—見忘れられた古事記の一面への注目

梅沢 伊勢三

日本歴史四一八

紫式部の「憂き身」意識—浮舟の物語をめぐって

佐藤 勢紀子

文化(東北大学文学会) 四七—一一・二

古事記編纂の事情

鎌田 純一

皇学館大学紀要 二二

大江匡房における世界認識

川口 久雄

国書逸文研究 一二

「日本書紀」の編纂過程に關する一試論—推古・舒明紀の検討を通じて

佐々木 一紀

日本歴史四一九

今昔物語の△今昔△—語りと時間認識

小峯 和明

国文学研究(早稲田大学国文学会) 八〇

記・紀批判の方法—坂田隆氏の問に答える

古田 武彦

鷹陵史学(仏教大学) 九

西行にみる人間と自然

宗 正孝

世紀 三九九

古代日本人の中国観—万葉歌を素材として

岸 俊男

『古代学論叢』

中国「正史」にみえる「日本」に対する呼称—倭(倭国)から日本(日本国)へ

三浦 徹明

論集(拓殖大) 人文・自然 一四一

祖霊同化の夢託歌—天武挽歌をめぐって

湯川 久光

文学 五一—三

「天皇」号の成立をめぐって—君主号と外交との関係を中心として

森 公章

日本歴史四一八

高市皇子挽歌の方法—人麻呂の殯宮挽歌と誄との距離

上野 理

国文学研究(早稲田大学国文学会) 八〇

飛鳥文化の背景(講演)

上田 正昭

秋大史学 二九

神道の原初的宗教観

岡田 重精

皇学館大学紀要 二一

祇園牛頭天王社の創建と天
王信仰の源流

松前 健

『古代学叢論』
角田文衛博士古
稀記念

古代における自然の開發と
信仰について

田中 正日子

第一經大論集
一三—二、三

伝教大師最澄の現実的性格
—三—

仲尾 俊博

密教学 一九

古代における御子神の存在
形態—「出雲国風土記」を
中心として

滝 音能之

地方史研究
三三—三

仁明天皇朝の神祇

熊谷 保孝

政治経済史学
二〇八

伊勢神宮における古伝承—
「太神宮諸雜事記」

西山 徳

皇学館大学紀要
二一

嘉祥寺・貞観寺雜考
国司神拝の歴史的意義

竹居 明男
水谷 類

文化史学 三九
日本歴史四二七

伊勢神宮の月次祭と祭祀体
系

熊田 亮介

文化(東北大学
文学会)
四六—三・四

法華經の思想的受容

鶴岡 静夫

『日本古代史論
苑』

「諸悪莫作」小考

菊池 克美

日本歴史四一九

平安初期における神仏習合
の展開—民衆の仏教受容

中川 修

竜谷大学仏教文
化研究所紀要
二二二

国家仏教についての考察—
奈良仏教の国家観を中心
として—上—

斎藤 博

仏教経済研究
一二

将門の乱前後の関東地域の
信仰と儀礼

遠藤 元男

『日本古代史論
苑』

道照伝考

水野 柳太郎

奈良史学 一

天平期に於ける戒律受容の
一齣—講律・布薩の伝承を
めぐって

平野 不退

龍谷史壇 八三

源信教学の思想史的展開
日本往生極樂記にみる倫理
と宗教

福原 隆善
下出 積與

『日本古代史論
苑』

行基と古代法

吉田 一彦

史報 五

行基の思想基盤について

吉田 靖雄

ヒストリア九七

慶滋保胤にみる浄土教受容
の側面

藤本 佳男

竜谷大学仏教文
化研究所紀要
二二二

「日本書紀」の仏教観

八重樫 直比古

政治経済史学
二〇〇

奈良時代の禪および禅僧

船岡 誠

宗学研究 二五

「九品往生義」の往生思想
について

奈良 弘元

精神科学 二二二

橋氏の成立と氏神の研究

義江 明子

日本史研究
二四八

日本思想史における密教の
諸問題(二)—覚鑊と浄土
教

黒木 幹夫

紀要(愛媛大・
教養)一六一—二

平安時代の神嘉殿について
—神事伝統の継承からみる
常設神殿の一成立過程

丸山 茂

論文報告集(日
本建築学会)
三三—六

古代民衆宗教運動と祭りの
習俗

小林 茂文

民衆史研究二五

大江匡房の年号勘申—匡房と俊房との関係	木本好信	神道史研究 三一—四
大王就任儀礼の原形とその展開—即位と大嘗祭	岡田精司	日本史研究 二四五
上代王権への史的映像—ヤマトにおける即位謙讓儀礼についての一考察	田中勝也	日本及日本人 一五七—二
カバネ制度と氏祖伝承—上	溝口睦子	文学 五一—四
カバネ制度と氏祖伝承—下	溝口睦子	文学 五一—五
武内宿禰伝承の研究序説	佐藤治郎	日本歴史四一—六
古代東國と大和政権—多摩における伝統意識の源泉を尋ねて—	中野藤吾	明星大学経済学 研究紀要 一—五
革命観と災異思想—律令国家成立期における変乱の特質—	本位田菊士	政治経済史学 二〇—八
革命観と災異思想—律令国家成立期における変乱の特質—	本位田菊士	政治経済史学 二〇—九
前期難波宮と古代官僚制	早川庄八	思想 七〇—三
古代百姓観の展開	梅村喬	論集 三三—三
古代賤民制と穢れ(覚書)	門脇禎二	部落問題研究 七—四
奈良朝政治史における天皇制の論理	河内祥輔	日本古代政治史 論考
国の昇格と国府の変容	米倉二郎	史林 六—六
大嘗祭 “辰日前段行事” 考	加茂正典	文化史学 三—九
朝賀儀式文の成立	所功	日本古代史論苑

「太神宮式」に於ける新嘗祭考	岩本徳一	紀要△国学院大 学V 一—四
祈年祭奉幣について	熊谷保孝	政治経済史学 二〇—〇
延喜式祝詞論序説	金子善光	神道宗教一—二
十一世紀中葉における成功制の変質	安田晃子	史学研究一—五八
法王考	田村圓澄	古代学叢論
わが国古代末期から中世初頭における障害者観—触穢思想による「非人・五体不具」説の形成	河野勝行	季刊科学と思想 四—九
横田健一「日本古代神話と民族伝承」	三宅和朗	歴史学研究 五—二一
塚口義信著『神功皇后伝説の研究』	米沢康	日本文化史研究 五
園田香融著『平安仏教の研究』	曾根正人	史学雑誌 九—二—四
平林盛得著『聖と説話の史的研究』	白井優子	日本仏教 五—六—五七

中世

中世前期の「無縁」について—日本における「自由と保護」の問題によせて	植田信広	国家学会雑誌 九—六—三—四
「誓約の場」の再発見—中世民衆意識の一断面	千々和到	日本歴史四—二—二
中世における東国女性の生活精神	遠藤元男	風俗 二—二—三

靈告をめぐる慈門の精神史的一考察	山本 ひろ子	論叢(寺小屋語学文化研) 二	自然―他力の救済	和田 真雄	親鸞教学 四〇・四一
晩年の慈門と『愚管抄』―祈りと夢告	名波 弘彰	論叢(寺小屋語学文化研) 二	教行信証と浄土文類聚鈔との前後の問題について	秀野 大銜	竜谷教学 一八
常陸における北畠親房	神沢 惣一郎	早稲田商学 三〇二	親鸞における救済論の構造―「真実」と「方便」	横井 徹	名古屋大学法政論集 九六
『神皇正統記』における芸能	我妻 健治	日本常民文化紀要 九	親鸞における批判精神	安富 信哉	日本仏教学会年報 四八
『神皇正統記』における「撰関制」論	佐々木 文昭	『日本古代政治史論考』	親鸞の還相回向論	幡谷 明	親鸞教学 四三
神皇正統記の「或童蒙」の再検討	平田 俊春	日本歴史四二一	親鸞の邪正批判	池田 勇諦	日本仏教学会年報 四八
万里集九の教育活動―15世紀後期における地方武士との交渉を通してみた	大戸 安弘	教育学研究 五〇―一二	親鸞の「他力」思想―行巻他力釈を中心に	岡 亮二	竜谷大学論集 四二三
永観と「中世」	五味 文彦	国立歴史民俗博物館研究報告二	親鸞の如来等同思想について	市川 浩史	日本思想史研究 一五
中世仏教における仏土と王土	佐藤 弘夫	日本史研究 二四六	値遇―親鸞と危機意識	安富 信哉	大谷大学研究年報 三六
逆修考―中世信仰史上の論拠と実態	池見 澄隆	浄土宗学研究 一四	和語聖教にみる親鸞の念仏思想	岡 亮二	真宗学 六七
別所について―古代仏教の中世的展開	吉田 清	花園史学 四	親鸞と日蓮における誓願論の構造比較―「親鸞一人」と「日蓮一人」	田中 久文	『日本倫理思想史研究』
中世における他界観念の―様相―『発心集』をめぐる	高島 元洋	『日本倫理思想史研究』	真宗における正邪の諸相	徳 永道雄	日本仏教学会年報 四八
法然浄土教における正と邪	佐藤 健	日本仏教学会年報 四八	「正法眼蔵」における正と邪	吉田 道興	日本仏教学会年報 四八
法然の仏道観―特に「悉有仏性」を中心として	神戸 和麿	大谷学報 六二―四	道元禅における倫理的 성격	原田 弘道	日本仏教学会年報 四八
			道元禅における祇管打坐	斉藤 知正	高崎経済大学論集 二五―二・三

道元における起の一考察	大野 順一	文芸研究(明治大学文芸研究会) 四九	明恵、数寄と菩提心―「夢の記」	桶谷 秀昭	国文学解釈と教材の研究 二八―四
道元における時間と言語―「正法眼蔵随聞記」	由良 君美	国文学解釈と教材の研究 二八―四	明恵と親鸞	田中 久夫	日本歴史四二五
日本禅家における三教一致批判―道元禅師とその門流について	大谷 哲夫	北海道駒沢大学研究紀要 一八	明恵と和歌―歌道の師、歌道と仏教をめぐって	野村 卓美	季刊文学・語学 九六
道元と如浄―9―「如浄禅師語録」到来を中心に	伊東 洋一	文経論叢(弘前大学文学部) 一八	「元亨釈書」の仏法観	大隅 和雄	金沢文庫研究 二七―一
中世日中禅思想交流史の一断面―1、2、3	星 清	文明(東海大学) 三七、三八、三九	蓮如における信仰構造の研究―3―女人往生思想について	山崎 龍明	武蔵野女子大学紀要 一八
日蓮から見た正と邪	浅井 円道	日本仏教学会年報 四八	詩と禅思想―五山の漢詩	小西 甚一	国文学解釈と教材の研究 二八―四
日蓮聖人の破邪顕正について	桑名 貫正	日本仏教学会年報 四八	「キリシタン時代における「教商」について	高瀬 弘一郎	古文書研究二一
日蓮と女性檀越	高木 豊	『日蓮教団の諸問題』	ザビエルとキリスト教と鹿兒島	林 邦夫	『鹿兒島県の地域と歴史』
踊り念仏と一遍とに関する二、三の問題	今井 雅晴	日本仏教史学 一八	「入道西行」をめぐって	坂口 博規	北海道駒沢大学研究紀要 一八
一遍上人の思想と安心決定鈔	普賢 晃寿	竜谷大学論集 四二―二	平家物語の因果観	佐伯 真一	日本文学 三二―四
鎌倉時代の唯識	太田 久紀	金沢文庫研究 二一―七	方丈記考―2―その無常観の詠嘆性の問題について	関口 忠男	日本文学研究 二二―二
貞慶と神祇信仰―釈迦信仰の展開を中心に	上妻 又四郎	論叢八寺小屋語学文化研 二	「発心集」教寄説話群の思想性	山本 一	日本文学 三二―九
「摧邪輪」考―高弁の念仏批判	末木 文美士	理想 六〇六	無常と日本の美意識―鴨長明と運慶のこと	田中英道	国文学解釈と教材の研究 二八―四

「徒然草」の有職故実的章
段の問題点について

伊藤博之

成城国文学論集
一五

「異香」と「舐る」——『春
日権現験記』絵にみる中
世民衆の感覚

黒田日出男

月刊百科二五四

五山文化と夢窓國師

川瀬一馬

書誌学
三一・三二

一休『狂雲集』の詩と思想
——エロチシズムの行方

田中久文

季刊日本思想史
二二

謡曲「山姥」が暗示するも
の——古代的經驗の解説への
序章

野崎守英

『日本倫理思想
史研究』

『太平記』の人間理解

相良亨

『日本倫理思想
史研究』

“大平記”の普及と大楠公
の崇拜

藤井貞文

神道学 一一八

国家概念の再検討(その2)
(その3)——日本中世国家
論のための予備的考察

長坂伝八

研究と評論
三〇・三一

いわゆる「仏法領」につい

遠藤一

竜谷史壇
八一・八二

戦国大名尼子氏家臣の時勢
観——家臣河本隆政の「雲陽
軍実記」より

勝田勝年

国学院雑誌
八四—八

『沙石集』における「道理」

倉沢幸久

『日本倫理思想
史研究』

無常事大——法師兼好のこと

水林澄雄

明治学院論叢
三四〇

渡辺昭五著「浄土教と中世
文学」

菊地仁

芸能二五—一〇

伊藤唯信「浄土の成立と展
開」

林淳

宗教研究
五七—二

石尾芳久「一向一揆と部落
——被差別部落の起源」

寺木伸明

部落解放二〇三

三浦圭一著『中世民衆生活
史の研究』

網野善彦

社会経済史学
四九—四

長谷川端著『太平記の研究』

和田英道

国語と国文学
六〇—四

近世

徳川前期儒学史の一条件
(二・完)——宋学と近世日
本社会

渡辺浩

国家学会雑誌
九六—七・八

日本近世国家の世界史的位
置——水林彪「近世の法と国
制研究序説」によせて

山本博文

人民の歴史学
七五・七六

日本のユートピアと政治経
済学史概略——近世を中心

林喜代三

一橋研究八—二

江戸時代における儒教の理
解と変容——近代化・近代思
想との関連において

宮崎道生

国学院雑誌
八四—一一

日本における『伝習録』——
日本陽明学の一素描

吉田公平

紀要(東北大・
教養) 三九

「郡県」と「封建」—中国
的カテゴリーと幕藩制

石井紫郎

『東西法文化の
比較と交流』

伊藤仁斎の思想と詩歌

黒住 真

季刊日本思想史
二二一

「職分論」の一考察

高橋光二

紀要(早大・院
・文学)別—九

伊藤仁斎の「道」—善定立
の姿にみる

〃

『日本倫理思想
史研究』

江戸時代の「琉球」認識—
新井白石・白尾国柱・伴
信友

横山 学

南島史学 二〇

伊藤仁斎における「有」把
握—「異端的なる思想」へ
の批判と連関して

高橋 文博

〃

「信長公記」の作者太田牛
一の世界

岩 沢 愿 彦

史叢 三三二

「俗と誠」について—伊藤
仁斎の場合

黒 沢 幸 昭

山梨大学教育学
部研究報告三三三

『玉講附録』の成立とその
意義

近 藤 啓 吾

芸林 三三—二

伊藤仁斎の人間観—『孟子
古義』の諸稿本を中心に
して

丸 谷 晃 一

論叢(寺小屋語
学文化研) 二二

綱齋・強齋と「文公家礼」

田 尻 祐 一 郎

日本思想史研究
一五

藩翰譜成立小考

荒 川 久 寿 男

皇学館論叢
一六一—三

近世初期における朱子学的
思惟の自潰—中江藤樹の
「心迹差別」論を中心と
して

荻 生 茂 博

日本思想史学
一五

荻生徂徠の「鬼神」論

中 村 春 作

日本思想史学
一五

東洋の自然法論と本性適合
的認識—中江藤樹による人
間存在論

水 波 朗

『東西法文化の
比較と交流』

荻生徂徠の聖人観—孔子聖
人考

末 木 恭 彦

〃

熊沢蕃山—下—(遺稿)

守 本 順 一 郎

季刊科学と思想
四七

習熟と思慮—徂徠学の方法
論

澤 井 啓 一

〃

熊沢藩山と伊藤仁斎

宮 崎 道 生

『日本史学論
集』下

古文辞学派の詩と思想

野 口 武 彦

季刊日本思想史
二二一

熊沢蕃山と荻生徂徠—上下

〃

国学院雑誌
八四—一・二

太宰春台の経済思想につい
て

塚 谷 晃 弘

国学院経済学
三一—一

山鹿素行の学校論に関する
考察—四

松 野 憲 二

明星大学研究紀
要 一九

本多綺蘭と服部南郭

中 田 勇 次 郎

大手前女子大学
論集 一七

不得已ノト—山鹿素行と
富士谷御杖の場合

黒 沢 幸 昭

『日本倫理思想
史研究』

京の脱徂徠学派 宇野明霞

高 橋 博 巳

日本思想史学
一五

新井白石と湯浅常山

宮崎道生

『岡山の歴史と文化』

湯浅常山—その「狂狷」世界

相見英咲

〃

経世済民と心学—陶山訥庵の研究

佐久間正

紀要（長崎大・教養）二四—一

安藤昌益考—直耕

前田康博

法経研究（千葉大）一三

安藤昌益のユートピア思想と社会哲学（イデオロギー）への考察

名越二荒之助

高千穂論叢 八三—一五

三浦梅園の自然哲学—『玄語』初稿本の成立とその意義

村上恭一

法政大学教養部紀要 四六

三浦梅園の実践哲学

南原一博

法学新報八九—一一・一二

広瀬淡窓の不安—その自己と超越的なるもの

高橋文博

季刊日本思想史 一九

広瀬淡窓の教育思想

関山邦宏

〃

『約言』の思想について

工藤豊彦

〃

教育理念としての「敬天」—『約言』『約言或問』をめぐって

田中加代

〃

天命と人情—広瀬淡窓の敬天論をめぐって

藤本雅彦

〃

広瀬淡窓の教育観—「教育」の語を中心に

藤原敬子

〃

『万善簿』と『陰騭録』

古川哲史

〃

頼山陽と日本外史—近世末期の最大教育者山陽と最も高社会教育書「日本外史」を探究する

本崎淹己

研究紀要（芦屋大）一八

頼山陽の詠史詩にみえる詠嘆

水沢利忠

季刊日本思想史 二一

亀田鵬斎における『莊子』と李白

徳田武

中国古典研究 二八

佐藤一斎の思想と教育—

山縣明人

政治経済史学 二〇〇

林良斎の『論語』解釈—六・七・八・九・一〇

木南卓一

帝塚山大学論集 三七・三八・三九・四〇・四一

伊勢の人・足代弘訓と大塩平八郎

堀本繁夫

大塩研究 一五

安田図書のこと

城福勇

日本歴史四一九

大塩の乱と女性

森田康夫

大塩研究 一五

大塩事件と自由民権運動—中—「民権百年」によせて、大塩と蘭学者らとの交流再検討

中瀬寿一

季刊科学と思想 四七

政治学上の観点よりする山田方谷陽明学の学風—とくに革命の学への転移

近藤真男

国士館大学政経論叢 四二

徳川光圀の儒観と水戸藩の史臣

名越時正

芸林 三二—一

前期水戸史学の歴史思想統考—安積澹泊『大日本史』「論叢」をめぐって

玉懸博之

日本文化研究所 研究報告 一九

水戸藩の思想と徳川齊昭

小島茂男

順天堂大学文理 学紀要 一九

藤田幽谷の政治思想—後期水戸学の形成	栗原茂幸	法学会雑誌(都立大)二四—二	吉田松陰における「天命」と「人力」	合田晃治	早稲田政治公法研究 一二
会沢正志斎における天と天皇について	田原嗣郎	日本歴史四一六	吉田松陰の士道論と民本思想	岡崎正道	日本思想史研究 一五
開国の論理と心理—華夷思想に即して	小池喜明	『日本倫理思想史研究』	吉田松陰の尊王思想	〃	文芸研究(日本文芸研究会) 一〇二
幕末・維新时期における「豪傑」的人間像の形成—変動期の人間観と人間像の問題をめぐって	源了圓	日本文化研究所研究報告 一九	勝海舟とキリスト教	岩楯幸雄	六浦論叢 二〇
佐久間象山の歌	中川千春	思想の科学第七次 三〇	幕末における日蘭文化交流の一齣—西周と津田真道のオランダ留学をめぐって	菅井鳳展	立命館文学 四五一—四五三
佐久間象山の西洋理解と「道徳」—1—	後藤広子	日本大学精神文化研究所・教育制度研究所紀要 一四	阿蘭陀通詞と『ア・ベ・ブツク』	片桐一男	史友 一五
村田清風における民衆支配思想の展開—普遍的思想から「術」的思想への転回	浅田雅直	山口県地方史研究 五〇	米沢洋学の伝統—蘭学より英学へ	池田哲郎	武蔵野女子大学紀要 一八
維新変革における政治的近代化を切り拓く政治主体性とそのエトスの成立—ペリ—来航前夜迄の横井小楠の思想と行動を中心に	楢原孝俊	政治研究(九大) 三〇	シンポジウム・日本の近代化と国学—「アジアの近代化と民族文化の発見」に向けて	山中芳和	国学院大学日本文化研究所紀要 五〇
「学校問答書」における「人才」と「政事」—横井小楠の政治思想—1—	内藤俊彦	法政理論(新潟大学法学会) 一五一—一	国学における教化論の性格	山中啓信	岡山大学教育学部研究集録六四
志士の思想形成—上—萩時代の吉田松陰	露口卓也	文化史学 三八	荷田春満の古事記について	中村啓信	国学院大学日本文化研究所紀要 五一
〃	〃	〃	山陵志に対する竹口栄齋の影響	阿部邦男	神道史研究 三一—二
〃	〃	〃	馭戎慨言と日唐戦争	瀧川政次郎	国学院雑誌 八四—八
吉田松陰の天皇観	山口宗之	日本思想史学 一五	平田篤胤の夫人織瀬伝の再検討—新史料による矛盾の解明	平野日出雄	神道宗教 一一二

山梨稲川の霊の真柱批判
山梨稲川と平田篤胤 | 1

平野 日出雄

神道史研究 三一—一

稲川と篤胤の学問・文芸の相互交流 | 2

” ”

” ” 三一—二

山梨稲川の死と篤胤 | 3

” ”

” ” 三一—三

矢野玄道と橋家神道との関係—玄道の臨終をめぐる稲門、最後の国学者—古註
尊重に徹した永井一孝の訓話学

福井 款彦

神道史研究 三一—四

小笠原敬齋略伝

金子 大麓

国文学研究(早稲田大学国文学会) 八一

町人学問所としての「公」

脇田 修

中国哲学論集九季刊日本思想史 二〇

三輪執斎の学風と懐徳堂
懐徳堂の歴史観

宮本 又次
時野谷 勝

” ” ”

懐徳堂の学問と大坂町人道
世近松前・箱館の寺子屋・私塾教育に於ける知育—寺子屋生徒教科書から見た考察

作道 洋太郎
浅利 政俊

” ” ” 松前藩と松前 二〇

藩校と鈴門—本居派および池派混成の藩校について

中村 一基

岩手大学教育学部研究年報 四三—一

幕末維新期の藩校と国学

南 啓治

国学院雑誌 八四—一一

天保期下級武士幕府昌平校
詩人と生活思想—「慷慨」—「学問」—「自由」への帰結

坂口 筑母

季刊日本思想史 二一

宇和島藩の蘭学
館林藩における洋学教育とその背景

影山 昇

瀬戸内論集 関東学園大紀要

代官襄笠之助の思想

高橋 光二

『近世の支配体制と社会構造』

化政期天領代官の思想と政策

西江 錦史郎

東洋研究(大東文化大学東洋研究所) 六六

好色と日常—西鶴の場合

窪田 高明

『日本倫理思想史研究』

「日本永代蔵」の一面—「正直」「孝」「天」

箕輪 吉次

学苑 五二八

近松の浄瑠璃制作論の問題点—「難波土産」発端の解釈をめぐる

千葉 篤

文学研究(日本文学研究会) 五八

『葉隠』と死

西村 道一

『日本倫理思想史研究』

上田秋成の人間観—「春雨物語」「樊噲」をめぐる

山田 隆信

” ”

東遠国学の指導者栗田士満の功績とその門人・門流の足跡

後藤 一日

国学院雑誌 八四—一七

香川景樹「新学考」—木曾谷桂園学派研究の中から

兼清 正徳

信濃三五—一二

幕府歌学方北村季文について—楽翁文人圏の人々(1)

松野 陽一

紀要(東北大・教養) 三九

竹枝の時代—江戸後期の風俗詩
司馬江漢の画論
寛政の改革と山東京伝

揖斐 高
小堀 一正
上保 国良

季刊日本思想史 二一
ヒストリア九七 史叢 三一

天正寺の創建・中絶から大
仏造営へ―天正期豊臣政権
と仏教

大桑 齊

大谷学報 六三―一二

島原・天草一揆の思想史的
考察

高秀 愛司

史流 二四

岡山藩における宗門改につ
いて―神職請から寺請へ―

倉地 克直

『岡山の歴史と文化』

本阿弥一門の思想構造につ
いて―明秀と光悦の法華信
仰を中心として

藤井 学

〃

近世における日蓮宗教学の
動向―応身為正の思想と信
仰について

小野 文瑠

『日蓮教団の諸問題』宮崎英修先生古稀記念

近世庶民信仰の側面―日
蓮聖人の略縁起を中心と
して

北村 行遠

立正大学文学部論叢 七六

大衆禅の確立について―盤
珪禅

唐木 裕志

香川史学 一二

日本思想史における密教の
諸問題(1)―慈雲と密教

黒木 幹夫

紀要(愛媛大・教養)一五―二

慈雲尊者と神道

平泉 洸

神道史研究 三一―一

法霖教学の思想史的意義―
「日溪三書」を素材とし
て

平田 厚志

真宗研究 二七

良寛の「こころ」について
の研究

高橋 茂雄

香川大学教育学部研究報告第一五九

「江戸仏教の特質」―4―
再び契沖と神道

高神 信也

智山学报 三二

伊藤栄跡の神道思想とその
意義―増穂残口への批判を
通して

小山内 めぐみ

神道宗教 一二二

復古神道と民衆宗教―幕末
宗教史研究序説

桂島 宣弘

研究紀要(日ノ本学園短大) 一一

開教期如来教の救済思想

神田 秀雄

日本史研究 二五六

白山修験の諸様相について

山口 久雄

日本海域研究所報告 一五

おかげ参りと世直し―徳川
期日本における宗教及び
社会的価値の研究

Winston Davis 松田 健

関西学院大学社会学部紀要 四六

幕末防長二州「真宗一派風
儀改正」運動―主に「改正
論言」を通して

平田 厚志

竜谷大学仏教文化研究所紀要 二二

一揆・騒動史の方法につい
て―「一揆」(東大出版会)
を前にしてのクロッキ

佐々木 潤之介

歴史評論 三九六

小田信士著「幕末キリスト
教経済思想史」

塚谷 晃弘

国学院経済学 三〇―一・二

伊東多三郎の「国学・洋学」
研究の課題―研究史の発展
を求めて

芳賀 登

歴史人類 一一

岡田武彦『江戸期の儒学―
朱王学の日本的展開』

吉田 公平

集刊東洋学 四九

近代

儒教と近代日本

猪城 博之

テオリア 二六

日本近代思想論序論

横地房彦

高千穂論叢
五七―一二

西周に於ける哲学の成立―
4・5・完

蓮沼啓介

神戸法学雑誌
三二―三三

国家と宗教―4〜8―

村上重良

法学セミナリ
三四三〜三四七

西周とカント哲学―「西周
における儒教と洋学」(渡
辺和靖「明治思想史」第
二章)を駁す

蓮沼啓介

神戸法学雑誌
三三―三一

日本と西欧における文化意
識の現代への流れ

ミヒヤエルシユ
タイン
(中島敬
彦訳)

国学院雑誌
八三―一一

『自助論』受容過程におけ
る「家」の思想

藤原暹

日本思想史学
一五

明治期神社政策の一考察―
鳥取県飯石郡掛合町を中
心として

華園聰磨

山陰文化研究紀
要 二三

明治開化と詩の「近代性」
―永井禾原の場合―

入谷仙介

季刊日本思想史
二一

王政復古期の教育と伝統主
義―長谷川昭道の皇学を中
心として

沖田行司

人文学 三九

明六社員阪谷素について
―会津人の明治―

高橋昌郎

日本史学論集下
日本及日本人
一五七二

明治八年左院の教部省処分
案―近代日本宗教史の一駒

阪本是丸

国学院雑誌
八四―一一

渡辺洪基と米沢の英学

松野良寅

英学史研究一二
総合ジャーナリ
ズム研究
二〇―三

明治皇室典範の制定過程と
大嘗祭

若井勲夫

神道史研究
三一―二

明治地域主義言論の担い手
―毛利柴庵と「牟婁新報」

門奈直樹

信濃三五―一二

敷田年治の神葬祭復興運動
に就いて

足立信治

神道史研究
三一―三

明治期長野県北部における
大道長安主唱救世教の展開
と終末

矢野恒雄

研究報告(鳥取
大・教育)二五

明治前期の修史事業と飯豊
青尊即位説―修史館と宮内
省の対峙を中心に

秋元信英

日本歴史四二〇

福沢論吉の儒教批判に關す
る一考察

佐伯友弘

研究報告(鳥取
大・教育)二五

公家における明治維新―岩
倉具視を中心に

五十嵐曉郎

立教法学 二二

福沢論吉の「文明論的教育
観」

松村憲一

社会科学討究
(早稲田大学大
隈記念社会科学
研究所)
二九―一

華族の立憲制への対応と岩
倉―明治11年華族会館改革
運動を中心に

坂本一登

日本歴史四二三

福沢論吉における文明論の
展開

米原謙

下関市立大学論
集 二七―二

明治の海舟とアジア―5〜
10―

松浦玲

世界 四四八
四五四

福沢論吉の「社会聞見の教
育」観の形成とその展開―
『貧富論』前後の論説を
中心として

松村憲一

フィロソフィア
七一

西周の「學術の体系」粗描

小玉斧夫

駒沢大学外国語
部論集 一八

福沢論吉の「社会聞見の教
育」観の形成とその展開―
『貧富論』前後の論説を
中心として

松村憲一

フィロソフィア
七一

福沢諭吉における政治原理の構造と展開―「西歐近代」思想導入との関連―
 福沢諭吉の宗教観・覚書（日本近代社会成り立期における政治と宗教）
 王道楽土の行方―近代日本の「孟子」問題・明治啓蒙思想から北一輝まで
 明治初期の田辺における自由民権思想―「熊野叢誌」―「田辺近報」―「幼年雑誌」を中心
 竹越三又と民友社
 徳富蘇峰と京城日報
 民権期橋本地域の戸谷新右衛門頭彰と小室信介編―東洋民権百家伝―土居通彦「紀伊の記」を主たる対象として
 北陸自由新聞の私草憲法
 安達憲忠伝―岡山県下自由民権運動の源流
 徳富蘇峰と自由民権運動
 明治21年に発会した「文学会」について―徳富蘇峰記念塩崎財団所蔵の書簡を中心として―

安西 敏三 甲南法学 二二三―三・四
 藤原 正信 竜谷大学仏教文化研究所紀要 二一
 野口 武彦 文学 五一―八
 後藤 正人 くちくまの五七
 中村 青史 熊本大学教育学部紀要第二分冊 人文科学 三二
 柴崎 力栄 日本歴史四二五
 後藤 正人 紀要（和歌山大・教育） 三二
 池内 啓 日本歴史四一九
 内藤 二郎 駒大経営研究 一四―四
 榎林 滉二 研究論文集（佐賀大・教育） 三一―一
 高野 静子 日本史研究 二五二

美作の民権家・中島衛について
 筑前地方の自由民権運動について
 新潟県自由民権運動の展開と政党的成立
 九州改進黨の結成について
 田中正造「府県会規則の改正を遂げたり」
 愛国社路線と加越能自由民権運動―再興愛国社のオルグ活動と加越能地域の動向について
 民権政社の系譜―秋田改進黨に連なる政社に限定して
 明治八年・阿波「自助社」社則
 国定教科書と自由民権
 自由民権運動における自由教育論とその運動―土佐民権派の場合（教育における自由と統制）
 自由民権運動における自由教育論の考察―栃木県の事例を中心に
 中江兆民の唯物論の今日的意義―一―、二―
 自由党の日清講和条約構想―森本駿の講和構想を中心として（一）、（二）

ひろた まさき 『岡山の歴史と文化』
 上田 俊美 九州史学 七八
 滝沢 繁 地方史研究 三三―四
 水野 公寿 近代熊本 二二
 日向 康 社会科学の方法 一六―八
 森山 誠一 金沢経済大学論集 一七―一
 菊池 保男 秋大史学 二九
 手塚 豊 法学研究 五六―八
 堤 克彦 近代熊本 二二
 千葉 昌弘 教育学研究 五〇―三
 森 透 教育学研究 五〇―三
 福田 静夫 日本福祉大学研究紀要 五五・五六
 岩壁 義光 政治経済史学 二〇三、二〇四

星亨の明治初期民権思想

麻生 三郎

歴史評論三九六

星亨をどのように評価するか―有泉貞夫氏の新著「星亨」を中心に

稲田 雅洋

歴史評論四〇二

景山英子の女性解放思想―民権期を中心に

光田 京子

『岡山の歴史と文化』

富井於菟にみる明治の女性像

青木 充子

〃

『農事雑報』社主、十文字信介―明治中期の農業思想家

藤井 隆至

日本歴史四二〇

答案よりみた国民思想の育成―日清戦争前的高等小学校

吉岡 勲

皇学館論叢 十六―六

近代日本における宗教批判と知性の問題

小菅 奎申

中央大学論集四

大隈重信「教化的国家論」の構成―その「内容」と「教化」の構造

鈴木 木慎一

社会科学討究 二九―一

明治政府のプロシア主義の採用と「独逸学協会」の活動

藤原 保利

日本大学人文科学研究所研究紀要 二七

学問啓蒙論・東洋外交政略論・立憲国民論―小野梓にみる資本主義的発展のための教育構想(上)(下)

尹 健次

思想 七〇六・七〇七

小野梓と地方自治

阿部 恒久

紀要(早大・史) 一六

島地黙雷における文明と宗教

大林 正昭

広島大学教育学部紀要第一部 三三二

明治初期における上総日什門流の動向

中村 孝也

『日蓮教団の諸問題』(宮崎英修先生古稀記念)

明治初期における政教問題―左院・教部省と真宗教団を中心

阪本 是丸

宗教研究 五七―三

明治期における仏教と進化論―井上円了の「仏教改良」について

中川 洗子

竜谷大学仏教文化研究所紀要 二二

蓮門教の崩壊過程の研究―明治宗教史における蓮門教の位置

武田 道生

日本仏教 五九

明治仏教の世俗化論―中里日勝の寺族形成

疋田 精俊

智山学報 三二

信仰と福祉―清沢満之と内村鑑三

吉田 久一

社会福祉 二四

清沢満之における求道の意味―特にその教育活動について

高橋 功

富士大学紀要 十六―一

明治末期における仏教と社会事業―大谷派慈善協会の設立を中心

山下 憲昭

龍谷史壇 八三

明治初期の日曜学校―播籃期の特徴

佐野 安仁

キリスト教社会問題研究 三一

日本におけるルター研究―徳善義和、金子晴勇、今井晋、倉松功の業績を中心に

竹原 創一

日本の神学 二二

内村鑑三研究―旧約篇2

岩谷 元輝

相模女子大学紀要 四七

内村鑑三における「武士道」の一考察

藤田 豊

人文学会雑誌(武蔵大) 十五―一

内村鑑三の「聖書」解釈	小原 信	青山学院大学一般教育部会論集 二四	木下尚江における日蓮への一考察	塚谷 晃 弘	国学院大学紀要 二一
明治期のキリスト教と文学 —内村鑑三・植村正久の文学観—	石田 昭義	六浦論叢 二〇	木下尚江「良人の自白」について—「破壊」先行作品として—	川 端 俊 英	同朋大学論叢 四八
海老名弾正におけるキリスト教受容—神観を中心として—	関 岡 一 成	神戸外大論叢 三四—五	浮田和民と倫理的帝国主義	松 田 義 男	早稲田政治公法研究 一二
基督論論争—海老名・植村における—	大 井 一 人	六浦論叢 一九	浮田和民における倫理的帝国主義の形成—二—	宮 本 盛 太 郎	法学論叢（京都大学法学会） 一一—二—四
植村正久試論—「志」の問題を中心—	鵜 沼 裕 子	『日本倫理思想史研究』	大正前期における犬養毅の思想と行動（Ⅰ）（Ⅱ）	時 任 英 人	政治経済史学 二〇六・二〇七
日清・日露両戦役をめぐる植村正久—その戦争理解を中心として—	渡 辺 茂	六浦論叢 二〇	「冬の時代」からの脱却—10月革命と日本—	小 林 英 夫	歴史学研究 五一—五
日清戦争とキリスト教（一）—「基督教新聞」と「福音新報」を中心として—	杉 井 六 郎	キリスト教社会問題研究 三一	農本主義と「大正デモクラシー」の地域的展開	東 庭 敏 雄	茨城大学人文社会学部紀要・社会学部 一六
柏木義円研究の現状と課題	林 達 夫	歴史評論四〇—二	大杉栄の革命思想	岩 淵 慶 一	立正大学人文科学研究所年報別冊 四
石原謙における宗教と神秘主義—とくにシュラエルマッハーの「宗教論」をめぐって—	水 谷 誠	基督教研究 四五—二	長谷川如是閑の「社会主義」と同体的国家論—一九二〇—三〇年代国家論の位相—	池 田 元	岡山商大論叢 一九—一
大正期における神社非宗教論—花田凌雲の場合—	藤 本 信 隆	竜谷大学仏教文化研究所紀要 二二—二	大山郁夫の政治思想—デモクラシー論を中心として—	高 橋 正 明	早大史学科紀要 一六
強権政治による「近代化」と民衆宗教の対立—大本教と弾圧事件の意味—	出 口 栄 二	社会科学討究（早稲田大学大学院社会科学研究所）二八—三	石橋湛山の満州事変批判論	増 田 弘	琉大法学 三三—二
			関一の自由主義思想	広 川 禎 秀	人文研究（大阪市立大学文学部） 三五—五

人間と文化―『六合雜誌』
における内ヶ崎作三郎

竹中 正夫

キリスト教社会
問題研究 三一

権藤成卿の革新思想

岡崎 正道

文芸研究一〇四

革新運動としての「協同主
義」―運動―革新協派と反革
農協派の場合

塩崎 弘明

年報近代日本研
究 五

大上末広の「満州型原始蓄
積論」について

浅田 喬二

経済学論集(駒
沢大学)
一五一

昭和前期右翼テロと司法

上田 誠吉

歴史評論三九七

井上日召の思想と行動―日
本ファシストの一類型

小林 英夫

歴史評論四〇〇

晩年の北一輝と明治国家の
諸「天皇」―『北日記』に
見られる「靈告」の考察

竹山 護夫

研究報告(山梨
大学・教育)
三四

河合栄次郎の自由主義論―
昭和前期における思想的
位置

武田 清子

社会科学ジャー
ナル 二一―二

河上肇に関する若干のメモ

宮本 盛太郎

政治経済史学
二〇六

大谷啓介『幻の花』そのほ
か―昭和期社会運動関係伝
記類管見―

中村 隆英

年報近代日本研
究 五

中井正一の反ファシズム思
想

豊沢 肇

民衆史研究二四

三木清とマルクス主義

竹内 良知

関西大学文学論
集 三三一―一

三木清におけるパスカルと
親鸞

佐藤 真理人

比較思想研究九

昭和思想史における倫理と
宗教―4―三木清の親鸞理
解―

峰島 旭雄

早稲田商学
三〇二

日本のファシズムと知識人
たち―一九三〇年代思想史
の一断面―

飯田 信夫

唯物史観 二四

ファシズムの空間と象徴Ⅱ
―大東亜の新様式―

井上 章一

人文学報 LV

天皇イデオロギーと親英米
派の系譜―安岡正篤を中心
に―

小田部 雄次

史苑 四三一

「国民精神総動員」運動と
「国体」論―「臨調」国家
観と関連して―

土方 和雄

季刊科学と思想
二七

日本ファシズムの体育思想
の研究(Ⅲ)(Ⅳ)

入江 克己

研究報告(入鳥取
大・教育) 二五

神道系教団に関する終戦前
の研究状況について―教派
神道論を中心―

井上 順孝

国学院大学日本
文化研究所紀要
五一

鈴木大拙における禅と念仏
―世界宗教への課題性を
含めて―

橋本 芳契

日本海域研究所
報告 一五

九鬼周周の日本主義

藤中 正義

岡山大学文学部紀
要 四

ニヒリズムに関する一試論
―「ニヒリズム」思想の日本移
入をめぐって―

手川 誠十郎

立正大人文研紀
要 別冊四

和辻哲郎の思想形成と転向
について(下)―父瑞太郎
・夏目漱石・ハイデッカー
―

狩野 日出男

現代科学論叢
一七

一五年戦争下の民衆像をめぐって

広川 禎 秀

新しい歴史学のために 一七二

文人としての大西祝

磯野 友 彦

比較文学年誌 一九

記念講演 民衆史における鎮魂

黒田 俊 雄

部落問題研究 七六

南方熊楠における普遍主義・自然主義・ナショナリズム

太田 哲 男

日本思想史学 一五

木代修一著「増補日本文化の周辺」

鶴岡 静 夫

史迹と美術 五三(四)

問題群としての西田幾多郎の日本の哲学

中村 雄二郎

思想 七〇四

透谷における「ハムレット」受容の意味について―人生相渉論争の底流―

出原 隆 俊

国語国文 五二(六)

西田哲学における「純粹経験」と人格性

荒井 正 雄

哲学と教育三〇

高山樗牛の「本然の自己」

竹内 整 一

『日本倫理思想史研究』

西田幾多郎―「善の研究」

饗庭 孝 男

理想 六〇三

露伴と道元における愛

瀬里 広 明

人文学科論集 一八

西田幾多郎―「自覚に於ける直観と反省」

〃

〃 六〇四

佐々木豊寿と国木田独歩

岡村 登 志 夫

桜美林論集一般教育篇 一〇

西田幾多郎―「芸術と道徳」

〃

〃 六〇五

夏目漱石における「自然」―「それから」を中心に―

宗 正 孝

『日本倫理思想史研究』

西田幾多郎―「私と汝」から「論理と生命」へ

〃

〃 六〇六

漱石におけるウィリアム・ジェームズの受容について―二意識の選択作用の説をめぐって―

小倉 脩 三

日本文学 三二(六)

西田幾多郎と財閥経営者―「準備集」論的アプローチ

瀬岡 誠

京都学園大学論集 一二―二

木下左太郎とキリシタン資料

福島 邦 道

実践国文学二三

昭和思想史における倫理と宗教―三―高橋里美の場合

峰 島 旭 雄

早稲田商学 三〇〇

平林初之輔とその時代―二―大正九年

渡辺 和 靖

愛知教育大学研究報告 人文科学 三二

戦中思想再考―竹内好を手がかりとして

鶴見 俊 輔

世界 四四八

戦争と文学―一九三〇年代「日本浪曼派」の保田与重郎と亀井勝一郎に見る

佐藤 静 夫

季刊科学と思想 四七

福島恒雄著『北海道キリスト教史』

中川 収

日本の神学二三

峰島旭雄編『近代日本の思想と仏教』

島田 燁 子

宗教研究 五七一―

雨宮榮一著『日本キリスト教団教会論』 赤木善光 日本の神学二二

高瀬善夫著『一路白頭ニ致ル―留岡幸助の生涯』 藤野豊 日本史研究二五二

藤井松一著『近代天皇制の成立と展開』 鈴木正幸 歴史評論三九九

井出嘉憲著『日本官僚制と行政文化』 原田敬一 日本史研究二四九

大江志乃夫著『天皇の軍隊』 遠藤芳信 日本史研究二五〇

戸村政博編著『天皇制国家と神話―靖国―思索と闘い』 村上伸 日本の神学二二

宮本又次著『五代友厚伝』 小路田泰直 日本史研究二五〇

佐藤誠朗著『ワッパ騒動と自由民権』 稲田雅洋 日本史研究二五五

色川大吉責任編集『三多摩自由民権史料集』 稲田雅洋 日本史研究二五〇

栄沢幸二著『大正デモクラシー期の政治思想』 成田龍一 日本史研究二四八

栄沢幸二著『日本のファッション』 古屋哲夫 日本史研究二五二

犬丸義一著『日本共産党の創立』 岩村登志夫 歴史評論三九八

塩田庄兵衛著『日本社会運動史』 梅田俊英 歴史評論三九九

西川祐子著『森の家の巫女高群逸枝』 犬童美子 日本史研究二四八

鶴見俊輔著『戦時期日本の精神史』 赤澤史朗 日本史研究二五三

補遺

聖徳太子の『勝鬘經』受容について(承前) 武田賢壽 同朋大学論叢四七

孟子の禪讓放伐思想と吉田松陰の「同と独」の思想 東中野修 アジア研究所紀要九

和辻哲郎と夏目漱石 今西順吉 比較思想研究九

日本の近代化と国学 園田稔 国学院大学日本文化研究所紀要五〇

紫式部の「法華經」理解の程度―清少納言との比較を中心 大場朗 国文学踏査二二

古代氏族と宗教―物部氏の伝承について 日野昭 竜谷大学仏教文化研究所紀要二一

発刊の辞

東北大学法文学部の開設とともに、故村岡典嗣氏を初代の主任教授として日本思想史学専攻が設立せられたのは大正十二年のことである。

昭和二十一年春、村岡氏が定年退官せられて後、後任者の得難きままに九年余を経て、昭和三十年に故竹岡勝也氏が就任せられた。しかし竹岡氏も在職二年にして定年退官せられ、一年を経て昭和三十三年に私が両教授の芳燭をけがすことになった。

本専攻の学部（第三・四年）は「日本思想史学専攻」として文学部史学科に属し、大学院（修士・博士課程）は「国文学国語学日本思想史学専攻」として文学研究科に属している。日本思想史学の独立の講座を基礎として、日本史（国史）専攻、乃至は国文学専攻または倫理学専攻とは別に、独立した「日本思想史学専攻」が設けられているのは、東北大学のみである。

以上の如き本専攻の歴史と現状に鑑み、関係者相い諮って、専攻専属の機関誌として、本誌を刊行し、その研究・教育の状況を学の内外に紹介することにした。大方の御援助を仰ぐ次第である。

昭和四十二年三月

石田 一良

日本思想史研究 第十八号

昭和六十一年三月十五日 印刷
昭和六十一年三月二十五日 発行

編集代表者 玉 懸 博 之

仙台市日の出町二丁目四ノ二

印刷所 (株) 仙台共同印刷

仙台市川内

発行所 東北大学文学部

日本思想史学研究室

